
とある過負荷の大嘘憑き

A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある過負荷の大嘘憑き

【Nコード】

N2505Z

【作者名】

A

【あらすじ】

その日

学園都市最強の能力者一方通行は、かつて彼がある実験で殺した少女と戦っていた。それを仕掛けたのは縋り付きたくなる嘘をいう男で……

白井黒子は風紀委員の仕事である男と出会った。

その男は血だらけの螺子を持って楽しそうに笑う男で……

浜面仕上は滝壺理后のお見舞いに向かう途中である男に出会った。
その男はかつての仲間と一緒にいて……

上条当麻は買い物物の帰りにある男に出会った。
その男は心を平気で踏みにする言動をする男で……

「『知ってる？』」

「『君が今まで殺してきた幻想ってのは』」

「『その人の夢』」

「『その人の正義』」

「『その人の信念』」

「『そして何より』」

「『その人、そのものなんだよ？』」

過負荷と学園都市が、

そして

オールフィクショナルブレイカー

不幸と不幸が

交差するとき、物語は始まる！

.....

「『めだかボックスと、』」

「『とある魔術の禁書目録の』」

「『クロスオーバーだよ』」。

「『生温かい目で見て下さい』」

プロローグ／黒幕同士の会話／

「久しぶりじゃないか」

そのビルには窓が無い。

それどころか、ドアもなく、階段もなく、エレベーターも通路もない。

建物として全く機能しないそのビルは、レベル4の空間移動エレベーターがいなければ出入りすることすらできない最硬の要塞。

窓の無いビル

そう呼ばれるビルの中で学園都市統括理事長、アレキスター＝クロウリーは呟いた。

「懐かしいな。君が私の前に訪れたのは何十年ぶりだ？あの時は魔術師として出会ったな。その姿を見るところ、今は学生をやっているのかな」

アルカリ性の液体で満たされたビーカーの中で逆さまに浮かぶ『人間』は抑揚の無い声で言う。

しかし、

話し相手はアレキスターの前にはいない。モニター越しにもいない。そんな存在が確認できない者を相手に『人間』は確かに会話をしていた。

「ほう。君が封印されたのか。不知火も。まさかそんなことをできる者が存在したとはな」

実に興味深い。と笑うように言ったアレイスターは虚空を見つめる。そこに誰かがいるかのように。

「それが本当なら恐ろしい能力だが、なぜそれを私に伝える？」

アレイスターは居るはずのない相手に問いかける。

しかし、アレイスターも分かっているのだろう。

相手は意味もなくこんな話はしない。予定調和のような会話。

「この学園都市に向かってきている、か。実に面白いことだ。上手くいけば『プラン』の省略にも繋がるかもしれない」

言うと同時に、アレイスターの目の前に赤く輝くモニターが大量に表示された。

赤色は警告、エラー、様々な緊急事態を表示している。

「どつやらご到着のようだ。」

室内に輝くエラーの集合体を見て『人間』は笑みを浮かべる。

喜怒哀楽すべてに当てはまり、同時にすべてに当てはまらない説明不明の笑み。

その笑みを浮かべて、アレイスターはクロウリーは言う。

「彼の名前を聞こうか。安心院なじみ」

第1章 「気持ち悪いでしょ？」

一方通行は、学園都市最強の超能力者である。

総人口役230万人の内、8割を占める学生たちは日々、【能力】を身に着けるために

開発を受けている。その中でも7人しかいないレベル5の頂点の第一位。

とある事件をきっかけに使用に制限はあるものの、熱量、電気量、運動量といったベクトルを操作するという、反則的な能力は未だに健在である。

あの幻想殺しの少年を筆頭にイレギュラーな存在以外では、例えば核弾頭でさえ、彼に傷をつける事ができない。

そんな能力を持つ彼は現在、ある存在から逃走をしている。

限りある能力を使っては撒き、追いつかれればまた逃げる。

堂々巡りの鬼ごっこ。

終わりの無い、

終わった筈の物語。

無くなった筈の計画が、なかつた事に。

「ちィ、なんなんだよ。この悪夢はア！」

苛立ちまぎれに足を止め、足元に転がっていた空き缶を蹴り付ける。放物線を描き飛んでいく空き缶。そして地面に落ちた先に追跡者は立っていた。

「はっ！お早いご到着で！」

その紅い眼で追跡者を睨み付ける一方通行。しかし彼女は喋らない。

「ちっ。必要事項以外はだんまりかよ？」

その頭部にゴーグルを装着し、常盤台中学の制服に身を包む少女。そしてその格好には物騒すぎるライフルを抱えている。

一歩彼女は一方通行に近づき、ようやく口を開いた。

「一方通行、実験開始から十三分十三秒が経過しています。このままでは計画に誤差が発生します。速やかに第00001次実験を遂行してください」

無感情に、

無感動に、

無関係に、

無価値に、

彼女は言葉を発し

ライフルを構え、続けて言った。

「 とミサカは躊躇もなく引き金に掛けた指に力を込めます」

そう、目の前にいるのは
かつて一方通行が殺害したはずの

ミサカ00001号だった。

？

「くそつたれがア！」

叫びながら重力を操作し、空高く飛びあがる一方通行。

それを追って、ミサカ00001号は
ライフルの照準を空中の一方通行へと向ける。

「空中では動きに制限があります、とミサカは標的を狙い撃ちます」
本来、ベクトル操作を応用した反射を使えば、
そこで勝負の決着はつくのである。

しかし、彼は反射をしない。

反射をすれば必ず彼女が死ぬ。殺してしまう。
また殺してしまう。

一万回死んだ彼女。
一万回生きた彼女。
守ると決めた彼女。
自分を補ってくれている彼女。

自分の身を守る為に殺すなんてことは、
自分の幻想を守る為に死なすなんてことは、

今の一方通行には、出来なかった。

そして弾丸は、
彼の右脇腹を打ち抜いた。

そして

そのまま地面へと落下する。

脇腹から血を流し微動もしない一方通行に

彼女は警戒しつつ近寄る。

「さてこのまま銃弾を撃ち込めば実験は終了致しますが、あくまで実験の目的は一方通行がミサカを殺害するのであって、ミサカが一方通行を殺害する訳ではありません、とミサカは携帯電話をおもむろに取り出します」

上層部に指示を仰いでもらうのがいいと

彼女は判断し、支給された携帯電話のたった一つしか登録されていない番号に発信をする。

コールが鳴る中、

一方通行を見下ろしながら

考えるミサカ000001号。

いくらなんでもあっけなさすぎる。

これが彼女の抱いた感想だった。

事前に学習した彼の能力を攻撃に使用されていたら、
実験開始数秒で自分はただの肉塊になっていただろう。

しかし、

彼は能力を逃走にしか使用せず、

身を守るべき反射も作用せず、

殺戮する為の操作も利用しなかった。

まったくもって理解不能。

彼女はただそう考えていたら、電話口から声が聞こえた。

「『やっほーミサカちゃん球磨川っです、と楔はハイテンションで電話に出っます』」

妹達の語尾を真似しながら、
陽気な声で話すこの男が、
今回の実験の首謀者。

球磨川楔。

「ふざけないで下さい、とミサカはミサカの真似をされたことに苛立ちを覚えます」

「『えー冗談でしょーと楔は驚きますー』」

「……………」

「『ホントに冗談はやめてよねミサカちゃん。君の感情は無かったことにしたんだから』」

「『苛立ちなんか覚えるわけないだろう?』」

「『きっとそれは学習装置で学んだそれらしい対応をただけなんだよねー』」

「『ほら人形に自我があつたら気持ち悪いでしょ?』」

「『そうですね、とミサカは返事を返します』」

「『うん。分つてくれて僕は嬉しいよ。それで?用件は何?今から工口本を買いに行くから簡潔にお願いね』」

「『一方通行を瀕死の状態まで追い詰めました』」

「『このまま殺害をしてもよろしいでしょうか?とミサカは確認を取ります』」

先程からピクリとも動かない一方通行。

彼が来ているTシャツは銃弾を受けた時に出来た穴と、

少量の血が着いているだけで、綺麗なままである。

彼女は一方通行から目を離し、月を見上げる。

「『うーん本当はどんどんミサカちゃんを殺してくれるのがベストなんだけど……』」

『まあいいや。どうせ罪を償うんだーとかそんな考えを持つ一方ちやんには用は無いから』

「『殺しちゃっていいよー』」

ずいぶんと軽い返事で、一方通行の殺害許可が下りた。

そして再び視線を戻すと……

一方通行の姿が、無かった。

？

彼女の思考回路が一瞬パニックを起こす。

動ける傷ではなかった筈だ。

働ける体ではなかった筈だ。

「それにあの出血量では意識を失っていてもおか……！！」

状況を確認する為に口走った言葉で、先程までの一方通行の姿を思い出す。

《Tシャツは銃弾を受けた時に出来た穴と、少量の血が着いているだけで、綺麗なままである。》

少量の血だけで済むはずがない。

出血多量で絶命してもいいような箇所に銃弾は当たった筈である。

「ベクトル操作で玉を摘出し、そのまま血液の流れをちょっとだけ弄って、出血を止めただけだ」

状況を呑み込めないミサカ00001号の背後から、疑問への解答が投げかけられる。

左手に携帯電話を持ったままとっさに振り向いて銃を構えるが、一方通行はそれに触れるだけで無効化した。

「さアて、ようやく黒幕とオ喋りできそうだぜエ」

両手を広げながら愉快そうに口元を歪める一方通行。

対するミサカ00001号は状況を打破すべく思考していた。

自分は丸腰、頼れる武器と言ったら【能力】しかない。

そして電撃を放とうとした瞬間、眼前まで一方通行が迫ってきた。

「悪イがちよっと眠っててもらおうぜ」

ミサカ00001号の額に手を当てて、一方通行はつぶやく。

そこで彼女の意識は途絶えた。

第一位の能力を使えばこんなことは容易い。

横たわるミサカ00001号の手から携帯を拾い上げ、耳に当てる。

「てめエか……こんなクソくだらねエ実験をまた始めたクソ野郎は」

「『わああ、一方ちゃん始めまして球磨川です！よろしくね』」

「『でもちよっと待ってね、今からエ口本をレジに持って行くこと』

るなんだ』」

「『やっぱりエロ本を買って行為はこのレジを通過するってのが醍醐味だと思うんだ』」

「『今はネットで誰にも悟られずに買うことが出来るけど、やっぱりこの緊張感を味わって皆大人になっていくんだと思うんだ』」

「『ちなみに僕はエロ本を買う時に参考書でサンドイッチをするなんて方法はとらないよ。むしろエロ本で参考書を』」

「うるせエ！そんな事を聞いてンじゃねエンだよ！てめエがこの実験の首謀者かって聞いてンだ！」

いきなりの外れなことを言い出した球磨川に怒鳴りつける一方通行。そんな決壊寸前のダムのような一方通行に球磨川は肯定の言葉を口にした。

「『うん、そうだよ。いやぁーちょっと面白そうな実験だったから中止になった事を無かったことにしてみました』」

死んだはずの妹達に追われ、攻撃を受け続け、逃げることにできなかつた彼のストレスは、今、爆発した。

「いいぜエ球磨川、そんなに死にてエンなら今すぐぶち殺してやんよ。で、てめエはどこにいる？」

一周廻つて冷静な口調で物騒なことを言う一方通行。

「『いやだなあ殺すだなんて、物騒なことを。何か悪い事でもあったのかい？』」

「『だいたい感謝をして欲しいくらいだよ。一万人以上の人間を殺しておいて平然と生きている君を心配してたんだよ？』」

「『俺は一生許されねエとかなんだっけ中二病？みたいな事言つてな』」

「『まあ、人間言葉の上ではなんとも言えるよねー。実際一方ちゃん死んでいった妹達の事なんてどうでもいいんだろ？』」

「『普通の人間は君みたいに生きていられないよ。あ、ゴメンね君は学園都市第一位の怪物だもんね、普通じゃないんだよね普通じゃ』」

「『だからこうやって普通じゃない君に、やり直すチャンスを与えただけじゃないか』」

「『君は今選べるんだよ一方ちゃん』」

「『もう一度二万人の妹達を殺すのか、それとも二万回殺されるのか』」

「『ちなみに00001号から10031号までは作り直しじゃなくて、あくまで君に殺された個体だからね』」

「『さあ選ばうよ一方ちゃん。どちらに転んでも君は救われるんだからさ』」

一方的にまくしたてる球磨川に対して、一方通行は何も言えなかった。

何か言葉を紡ごうとしても、出てこない。

黙っていると球磨川が最後通告を言い渡した。

「『ちなみに今日は打ち止めちゃんとエロ本を買いに来てるんだ。大丈夫心配しないで！ちゃんと家まで送り届けるからさ！』」

球磨川は歌うように行って、
絶望と共に電話は切れた。

第2章 「『ただの転校生だよ』」

「幽霊……ですか？」

風紀委員第177支部の室内。ツインテールの小柄な中学生、白井黒子は自分のデスクの上にある大量の書類に目を通しつつ、

非科学的な単語を言い放った同僚の言葉に返事をする。

「そうですね。最近学園都市内で亡くなった筈の人間が多く目撃されているそうですよ」

甘ったるい声で概要を説明するのは頭に大仰な花飾りをのせている初春節利。

その両手は休むことなくパソコンのキーボードを叩いている。ディスプレイに羅列している文字は次々と現れては消えていく。

「それも生前に理不尽な殺され方をした人物ばかりらしいです」

そう言っつて初春はエンターキーを叩いてから白井と向き合っつように椅子を回転させる。

「強い怨念を持った霊が、復讐を胸に蘇った。なんて噂まで立っています」

少し興奮気味に話す同僚に深いため息をついて、白井も初春と向き合っつ。

「まったくどこのC級映画のお話してますの？この科学の街、学園都市で。それにその幽霊とやらの実質的な被害は無いんでしょう？」

結局は都市伝説ですわよーと初春の意見を一蹴し、彼女は再び書類の山を崩しにかかる。

「むー夢がないなあ白井さんは」

そういつて頬を膨らます初春。

「そんなものが存在したとしたら例え夢でも悪夢ですの。自分に恨みを持った存在が蘇るなんて恐怖以外の何者でもないですわ」

「まあそうですねえ……つと白井さん！」

再び作業に戻ろうとした初春がパソコンに移された表示を見て、白井を呼びつける。

「事件ですよ！？」

言うが早いか自分の席から初春の真後ろに瞬間移動で移動した白井もディスプレイを睨み付ける。

「スキルアウトらしき数人のグループに一人の少年が暴行を受けています。場所は」

「了解ですよ！初春はサポートに回ってくださいまし」

通報場所を確認すると白井はそういつて初春の目の前から転移した。

？

「ジャッジメントですの。大人しく投降してください……」

空間転移を繰り返し現場の路地裏に到着した白井は、腕に着けた風紀委員の腕章を見せ付けるように言った。

報告ではスキルアウト数名に絡まれている男子生徒の保護だったはずだ。

白井はこういった事態に到着した場合は大概被害者は殴られ、金銭を要求されていたりしてボロボロになっている場合が多いのだが。

目の前に広がる光景はそんな生易しいではなく、まして一方的な暴行でもなく

まるで十字架に貼り付けにされたように巨大な螺子でビルの壁に串刺しになっているスキルアウト達だった。

「うっ……」

白井は思わず目を背けてしまった。

むせ返る血の臭い。もはやアスファルトの八割は血で赤く染まっており、所々に螺子切られたように転がる手足。

両目に螺子が刺さりだらしく口を開いている死体。達磨の様に両手両足が無い死体も例外なく貼り付けにされていた。

込み上げてくる吐き気を何とか飲み込み、再び地獄に目を向ける。

そこには学ランに身を包んだ少年が振り返り血を浴びて、無垢な笑顔で白井を見つめていた。

その両手には、スキルアウト達を貼り付けにした物と同じ、巨大で巨悪な螺子を携えていた。

「『あ！ちようどよかった風紀委員さんだ。僕、道に迷っちゃったんで教えてください、今すぐに』」

呆然としている白井にズカズカと近づいて両手を握る少年。

「あ、貴方は何者ですか？」

捕まれた両手を振り払い間合いを開けるように瞬間移動を使う。

「『そういえば自己紹介がまだだったね。僕は球磨川楔って言うんだ宜しくね』」

「まったく初対面で淑女の手を握るなんていくら何でも展開が速すぎますの」

「『いやあ今時のバトル展開の物語は展開をある程度巻いていかな
いと直ぐに打ち切りをくらっちゃうんだよね』」

大して人気も無いのに日常編を長いことやったりさ、となぜか残念
そうな溜息を吐く球磨川。

「話が全くこれといってこれっぽっちも噛み合っていないんです。こ
のスキルアウト達は貴方が？」

状況に吞まれない様に悠然とした態度で質問を球磨川に投げかける。

「『いや、僕が来た時にはもうこうなっていたんだ。だから僕は悪
くない』」

「ふざけてますの！？先ほど持っていた螺子！それにその返り血！
どう考えても無関係ではないでしょう！！」

「『だから僕のせいじゃないんだよ。彼らに道を尋ねたら絡んで来
たんだからさ』」

先ほどの発言をあっさり撤回して悪びれる様子も無く言い放つ球磨
川に苛立ちを覚える白井。

「正当防衛といえどこれは明らかにやりすぎですの！風紀委員の名に懸けてここで貴方を拘束します」

太股に忍ばせた鉄矢を手に構え、臨戦態勢をとる白井。もはや話し合いでどうにかなる相手ではないと判断した結果だった。

「『風紀委員の名に懸けて……ねえ。カッコいいなあ思わず僕も風紀委員に志願しちゃいそうだよ』」

「『それでその物騒なエモノでどうするつもりなのかな？風紀委員さん。週間少年ジャンプの中でなら死なずに済むかも知れないけど』」

「『現実とは違うんだから、その鉄矢をしまいなよ』」

「そうでしたら大人しくお縄をかけさせてくださいですの」

「『これから大事な用事があるからそれはできないなあ。あ！そうだし心苦しいけどちょっとの間君にも壁に張り付いて貰おうかな』」

右手の平に左の拳を合わせ、グッドアイデアだ言わんばかり言った。

そしてどこからか螺子を取り出した球磨川は躊躇も無く白井に襲い掛かった。

？

本来、テレポート空間移動は戦闘においてはかなり有利な能力である。

何しろ相手側からすれば攻撃が当たらない、攻撃の軌道が無いのである。

自分だけが疲弊し、傷を追っていく。

相手が同じ能力者や自分以上の高位能力者でなければ、戦闘に敗北することはあまりないのである。

ましてや白井は大能力者（レベル4）だ。

それこそ彼女が敬愛してやまないお姉様のような超能力者（レベル5）でも連れてこなければまるで歯が立たないのである。

そして。

その例に漏れることなく白井は球磨川を圧倒していた。

「あらあら。そんな螺子を振りまわすだけでは永劫の時を掛けてもわたくしは倒せませんわ」

球磨川は螺子を振りまわす。

しかし白井は背後に転移する。

球磨川は螺子を投げつける。

しかし白井は空中へ転移する。

攻撃をしては回避され、その隙に鉄矢を身体に打ちこまれる。

腕に。肩に。足に。膝に。掌に。脹脛に。

いくら凶悪な相手であろうと死に繋がる様な急所には鉄矢を打ちこまない。

ある意味それも風紀委員の名の誇りから行うことだった。

「『……………』」

それでも球磨川は懸命に武器を振りまわし続ける。

その表情から白井は不気味さを感じ取っていた。まるで拷問器具【鉄の処女】に挟まれた様に身体を穴だらけにされても、彼は

彼は、笑っていた。

「『全く瞬間移動だなんて、悟空と戦った敵の心情もこんな感じだったのかな?』」

「『ヤードラット星人もとんでもない能力を与えたもんだよね』」

「あいにくこの能力は自前です。それに、わたくしは惑星間の移動などできませんわ」

軽口には軽口で返す白井。

一体そのぼろぼろの身体のどこからそんな言葉を吐ける余裕が出てくるんですの?と思う。

「『そういえばドラゴンボールでは結局敵方も瞬間移動ができるようになったんだっけ?』」

「っは!そんなことは知りませんの。それともあなたも学習して瞬間移動ができるようになるん……ですのっ!?!?」

言うが早いか白井は一気に間合いを詰める。この戦闘で初めて白井から攻撃を仕掛けることになった。

(地面に倒し、一気に鉄矢で拘束しますわ!)

白井は決して能力だけの攻撃しかないわけではない。風紀委員としてある程度の武術は心得ていた。

(とっただ！)

球磨川の襟に手を伸ばし、組み手を取りにいく白井。

空間移動で間合いを詰めれば例え武術の有段者でも防ぐことはできない。

そして、襟に手をかけた

筈だった。

「え？」

虚空を掴む自分の手に動揺を隠し切れない白井。

そしてその手の先5メートル先には、掴むべき筈だった相手が何事も無かった様に立っていた。

(この男も空間移動能力者！？)

しかし、それでは今まで攻撃を受け続けていた理由が分からない。白井と同じ能力者であればこんな一方的な戦いにはならない筈。

完全に白井は混乱していた。

？

「『そんなに驚くことじゃないよ。ほら悟空だって瞬間移動を見切られて相手に真似されてたし』」

「…そ、そんなこと可能な訳が！もともと空間移動能力者なんですよー！？」

目の前で起きた現実を理解できない白井は、すぐるように叫ぶ。
多重能力者は理論上不可能な筈である。

あの一万人の脳を統べていた科学者の様に、ああいったイレギュラーな事例以外は一人につき能力は1つまで。

そう決まっているのだ。

「『嫌だなあ。僕にそんな【利点のある能力】がある訳無いじゃないか』」

冗談はやめてくれと言わんばかりに首を横に振る球磨川に、白井は違和感を感じた。

傷が。

さっきまで球磨川にあったはずの傷が全て治っているの
いや、傷だけじゃなく、穴の空いた衣類すらもまるでク
後の様に綺麗に直っている。

「……………」

目の前で起きている不可解な現象に、白井は思わず目眩を催した。

どうして、どうして、どうして、どうして……………」

「あ、貴方は……………」

消え入る様な声で、すぐる様な声で。

「貴方は、一体何者なんですの……………」

懇願する様に、困憊する様に、白井は問うた。

「『さっきも言っただろ？僕は球磨川袂。ただの転校生だよ』」

「『まあ、学園都市風に言えばレベル“マイナス”5の大嘘憑き』」

？

そう言っただけは白井の眼前まで瞬間的に移動する球磨川。

その両手にはどうしようもなく巨大な、どうしようもなく凶悪な。そしてどうしようもなく“マイナス”な螺子が握られていた。

もはや演算をできる程の余裕は白井には無い。

ただ目の前の男に恐怖し、足を震わすだけだった。

何もされていないのに、まるで足が地面に貼り付けられているようだった。

そんな彼女に、風紀委員だといってもまだ中学一年生の彼女に。

戦う意思などもう無い彼女に。

球磨川はにっこりと笑いかけて口を開いた。

「『それじゃあ、また明日とか。風紀委員さん』」

震える彼女など無関係に。

涙を溜めるその両目など無感動に。

か弱い女子中学生など無価値に。

球磨川は

彼女の

眉間に

螺子

を

だ ん 込 子 螺

？

とある病院の廊下。

そこに御坂美琴は立っていた。

廊下に設けられた長椅子に座ることも無く、
ただ拳を握り締めて病室を睨み付けていた。

御坂の横に座っているのは

初春飾利と

その親友の佐天涙子。

そして睨み付けている病室に

掲げられているネームプレートには、
ルームメイトであり、
大事なパートナーの名前があった。

「じ、じらいざんが……なんで、どうじでえ……」

御坂が佐天から連絡を受けて病院に到着してから、初春はずっとこのように泣きじゃくっていた。

そしてどんな声をかけて良いのか分からずに、ただ泣くことを我慢している佐天も俯いたまま喋ろうとしない。

それでも御坂は半ば無理やり佐天から情報を聞き出した。

ぼつりぼつりと話す彼女の話をまとめるところだったものだった。

初春と白井が仕事中に暴行事件の通報を受けた。そして白井が出勤し、初春がサポートをしていた。

現場までのナビをしていた初春は、なぜか白井が現場に到着したとたん連絡がつかなくなったことに不安を覚え、

アンチスキルに応援を要請。そして非番である先輩に連絡を入れた後、初春は単身現場に向かった。

アンチスキルよりも早く到着した初春が目撃したのは、壁に貼り付けにされていた“人間だったもの”6体と、

血の海の中“傷1つ無く”倒れていた白井だった。

そこから先は初春は気を失ってしまったそうだが、偶然通りかかった佐天とアンチスキルに保護され、今に至る。

そういった内容だった。

その話を聞いてすぐに御坂はノックもせず病室へと入った。

そこで見たものは自慢のツインテールをボサボサになるまで掻き毟りながベッドの上でうずくまる白井黒子と、

まるで強盗にでも荒らされたかのように散らかった病室だった。

花瓶は割れ、点滴は倒れ、カーテンは引きちぎられ、テレビのリモコンは真っ二つに割られている。

「黒子…アンタ……」

そこにいる白井黒子は、自分が一度も見たことの無い姿だった。

悠然と立ち回り、自分を見かければじゃれて来る白井黒子ではなく、何かに脅え続けている一人の人間だった。

なんて声をかければいいのか？そもそもそっとしておくべきなのだろうか？

そんな考えが過ぎつつが、このままの状態で放置というのはあまりにも薄情すぎる。

そして考えがまとまらないまま、白井に手を伸ばした瞬間。

「ああああああああああああああああああああ！」

その手を払われ、絶叫する白井。

はつきりと彼女に拒絶された御坂は目の前の現状をどうにかすることもできず、

ただテレビの中のフィクションを眺めるように立ち尽くすしかなかった。

白井の絶叫に気がついた看護師と医師が慌てて病室に入ってくる。

「先生！このままではまた自傷行為を！！」

「鎮静剤を！それと拘束具をもってこい！」

医師達に邪魔だと言わんばかりに、身体を押し出され、御坂はそのまま病室を後にする。

自分の差し出した手を払いのけられた痛みだけが、まだ残っていた。

？

「PTSD…心的外傷後ストレス障害といったほうが分かりやすいかな」

廊下に出た瞬間に声をかけられる。

視線を移せばそこにはカエル顔の医師が立っていた。

「危うく死ぬまたは重症を負うような出来事の後起こる、心に加えられた衝撃的な傷が元となる、様々なストレス障害を引き起こす疾患」

淡々とカエル顔の医師は続ける。

「彼女は現在そういった状況なんだ。それも通例に比べてとっても重大な状態だね。今はできる限りそつとしてやってくれると助かるよ」

「で、でも黒子には外傷も無いんじゃない……」

そう。佐天の話では無傷のまま保護されているはずである。

死に掛けたり、重症を負った訳ではないのだ。

「そう。そこがちよっと疑問なんだ。風紀委員なんだ。あの惨状を目撃して気を失うような子ではないと思う」

「でも、間違いなくPTSDなんだよ」

カエル顔の医師が言うように、白井はどんな惨劇でも耐え切る強い精神を持っている。それはこの場にいる全員が思っているだろう。

「目撃証言によると、彼女は誰かと交戦していたようだ。恐らくその際に何か心理的な攻撃をされたか……」

その言葉を聞いて御坂はある人物を思い浮かべる。

同じ常盤台のレベル5。心理掌握の事だった。

思案している御坂に頭を掻きながらカエル顔の医師が呟いた。

こんなオカルトを医師が言うのは良くないんだが…と前置きを置いて。

「一度殺されて、生き帰されたか、だ」

*

御坂美琴は初春飾利が所属している風紀委員支部、つまり風紀委員第177支部に居た。

腕を組んで、目を伏せて、壁にもたれ掛かった彼女の前では初春がパソコンのキーボードを物凄い勢いで打鍵している。

彼女が行なっているのは学園都市の監視カメラのログを閲覧する為

の作業。

御坂の指示で“あの時”何が起こったのかを確認する為のものだった。

因みに佐天涙子は自宅に帰っている。

少し体調が悪いそうだ。

「……完了です。映像が表示されます」

初春からはいつものような飴玉を転がしたような甘ったるい声ではなく、ひどくトーンの下がった声が聞こえた。

「ありがとう、初春さん」

彼女に労いの言葉を掛けるが、何の反応もない。

無理もない。これから観るのは親友でありパートナーがあそこまで堕ちていった原因となる映像なのだ。

当然、彼女も敵討ちをしたいと思っているのだろうが、やはり現実を直視するのは少しきついのかも知れない。

「……大丈夫ですよ、御坂さん。私は目を逸らしたりはしません」

心の中を見透かされたようにそう呟いた彼女は、しっかりとディスプレイを見つめ、事件発生時刻までログを遡る。

そして、映像が再生された。

？

映像には一人の男子学生がスキルアウトの男達に絡まれている所から始まった。

初めのうちは少年が一方的に殴られ、蹴られ、罵られている様だったが、時間が経つにつれて様子が変わってきた。

傷だらけの体が、服が何度も何度も治っているのである。

そしてその光景に気味悪がったのか、スキルアウト達が少し引いた瞬間。

少年は一人の男のわき腹に螺子を突き立てたのである。

そこから先は只の殺戮ショーだった。

少年に捕まれては螺子を刺され、逃げようとしたならば、なぜか急にその場に崩れ落ちたり、まるで視力を無くした様に自ら壁に走っていくものいた。

そしてスキルアウト達が例外なく壁に貼り付けにされた後、白井黒子が現れた。

「白井さん……！」

「黒子……！」

先ほどの病室に居た彼女とは打って変わって毅然とした態度で少年

になにやら話しかけている白井。

その姿に思わずディスプレイを見つめる彼女達から声が漏れる。

またもや序盤は一方的な戦い。しかし完全にフィニッシュの攻撃を仕掛けようとした瞬間、少年は瞬間移動したのである。

「…こいつも、空間移動能力者なの!？」

拳をさらに強く握り締めて御坂は画面を睨み付ける。

そして、少年の傷や衣類が治っていく様を見て、明らかに白井は混乱していた。

(自己回復能力と空間転移…)

少し冷静になり分析を試みる御坂。傷と一緒に衣服まで修復するというのは疑問ではあるが、

間違いなく彼は様々な能力を使用しているように見えた。

そして、再び言葉を交わしている画面上の二人。

少年が何かを言い終わった瞬間、今度は少年から白井に向かって瞬間移動をする。

その手には先程スキルアウト達を蹂躪した螺子が持たれていた。

「いや…やめて!」

再生されている映像だということを忘れたように初春は、すがる様に声を上げる。

しかし、そんな彼女の言葉は届かない。届くはずもない。

そして螺子は白井の頭を貫いた。

四方にその血を撒き散らしながら、糸の切れた操り人形のように崩れ落ちる白井。

少年はその光景を満足そうに眺めた後、返り血をハンカチで落とし、白井の頭から螺子を抜いた。

そして少年はその場を後にした。

「……………」

沈黙がその場を支配する。

(なんて事を……！絶対にコイツは許さない！よくも黒子を殺して?)

復讐の炎が御坂の中で激しく燃え上がった時に、彼女は一つの事実に気が付いた。

「ねえ初春さん。黒子は“無傷”で発見されたのよね？」

「はい……そうです……あ！」

御坂の問いかけで、初春もその事実に気が付いたようだ。

「そう。この映像のままだったら無傷なんてありえないのよ」

殺された、と言わないのは初春の配慮のためなのか、それともその事実を認めたくない自己防衛のためか。

しかし、御坂の言うとおり、ここまでされて無傷で済む人間がいる訳がない。

そしてディスプレイには驚きの光景が映し出された。

？

血を垂れ流していたはずの白井の頭からは、いつの間にか出血が止まっていた。

それだけではなく、血に濡れた頬も、制服も全て元に戻っていくのである。

そして全てが“なかった事”になった後、初春とアンチスキルが到着した。

そこで映像を切った。

再び沈黙が流れる。初春は病院でカエル顔の医師が言った言葉を思い出していた。

一度殺されて、生き帰されたか。

まさに目の前でそのオカルトな現象が起こっていたのである。

そんな初春とは違い、顎に手を当てながら思考する御坂。

レベル5第三位の思考をフル回転して糸口を掴もうとする。

(精神操作能力って訳ではないわね。それだったらこのビデオを観ている私達には効果がないから)

(空間転移能力も却下。それだとこの自己回復能力の説明が付かない。すなわち自己回復能力って線も相殺される)

(となると、第一位のベクトル操作のようなオンリーワンの能力の
はず)

(歩行機能や視力を奪う。傷や衣類すらも修復する。距離を一瞬で
詰める)

(その中での共通点は……)

「あー駄目だ！分かんない！」

「み、御坂さん？」

突然叫びだした御坂に驚く初春。

「ああごめん。ちょっと考え事を」

初春の言葉に冷静さを取り戻す。

しかしすぐに思考のスパイラルの中に落ちていってしまふ。

「御坂さん。この人の能力に関して考えてるんですか？」

「ええそうよ。でも駄目ね、さっぱり分からないわ」

両手を挙げ万歳をしてみせる。その姿をみた初春は何かを決心した
ようにディスプレイと向き合い、キーボードを叩き始めた。

「初春さん？」

その行動理由が理解できなかった為彼女に問いかけてみる。

「残念ながらあの映像に音声は入っていませんでした。なので彼がどこの誰かって言うのはすぐには特定できません」

「それでも、彼の制服はこの学園都市内の学校の物ではありませんでした。不正に進入した人間でなければ恐らく学園都市への転校生」

「不法侵入者という線は消して、ここ数週間で外部からの転校生を照会してみます」

「これも可能性の話になりますが、恐らくこの第7学区の学校……それも彼の年齢からして高校でしょう」

「その辺りから検索を掛けています……っとビンゴですね」

早口に説明をした後、椅子を回転させ振り返る初春は笑顔だった。無論、ただの中学生にわかるほど、この情報の機密は低くない。しかし初春は守護神ゴールキーパーの異名を持つ凄腕である。そんな彼女だからこそこの情報を手に入るレベルの情報。

白井を惨殺した男はそのレベルの敵なのだ。

「えっと……出ました。氏名は球磨川楔。以前通っていた学校は廃校。この人の情報、すごいセキュリティレベルでした。何者なんでしょう？それにこの能力……」

目の間に映し出されたデータを御坂は読み上げる。

「能力名【大嘘憑き（オールフィクション）】能力レベルは……
マイナス”レベル“マイナス”5?”」

第3章 「感動の再会だね」

「は！？フレндаが！？」

第7学区のファミレスで浜面仕上は大声をあげた。

テーブルに手を叩きつけたため、テーブルの上にあるグラスが揺れる。

しかし浜面はそんなことを気にしては居られなかった。

「大声を出さないくださいよ、浜面。お店と他のお客さんに超迷惑です」

テーブルの反対側。

浜面の対面に座っている少女、絹旗最愛は咎めるように言った。

見た目12歳くらいの、自分より年下の少女の忠告を受け、浜面は声の音量を落とす。

「大声も出るだろうが。お前自分が何言ってるのかわかってるのか？」

「私だって信じられませんよ。だから浜面に超相談してるんじゃないですか」

相談。そう、相談だ。

浜面は絹旗に相談がある、と言われて、このファミレスに呼び出された。

またどうせ、映画を一緒に見るとか、身分証を偽造しろ、とかパシリのようなことをやらされるんだらうと、決めつけていた。

そんな軽い気持ちだった。

だから信じられるわけがない。

フレндаが生き返ったなんて。

話を聞く限り、絹旗も直接見てはいないらしい。

元『アイテム』である彼女の元に情報が入ってきたそうだ。

情報と共に転送されてきた映像に映っていた少女は間違いなくフレндаだったらしい。

「浜面はどう思いますか？」

「信じらんねえよ。だって俺は……」

そう浜面は、
フレンドの死体を間近で見ているんだから。

10月9日

学園都市独立記念日であるその日に、暗部組織同士の抗争があった。その抗争の最中で、フレンドは同じ組織に属する超能力者（レベル5） 麦野沈利に粛清された。
上半身と下半身を真っ二つに切断されて、殺された。死んだのだ。

「そうですね。やっぱり超ガセネタだったんですかねえ」

絹旗は重くなった空気を拭うように明るい声を出す。

「生き返る、だなんてオカルト染みますしね。ここ学園都市でそんな非科学的なこと起こるわけありません」

本当に生き返ったんなら嬉しいですけど、と絹旗は言った。
彼女にしてみれば、フレンドは数々の死線を共に潜り抜けた友なのだ。
だ。

死んだ友が生き返れば嬉しいに決まっているし、友が死ねば悲しいに決まっている。

「絹旗……」

「超葬式みたいな顔しないでくださいよ浜面。ただでさえ不細工なのに余計不細工に見えますよ」

なんて言おうか迷っていたら、逆に少女に気を遣わせてしまった。そうだ。この少女は自分が思っているよりずっと強いのだ。

？

絹旗と別れた浜面はファミレスと同じ第7学区にある病院に向かっていた。

理由はもちろん明白で、滝壺理后のお見舞いである。

滝壺理后。

かつて絹旗最愛と同じ暗部組織『アイテム』に所属していた少女だ。『体昌』とよばれる物質を使い能力を使っていた彼女は、その副作用で身体を蝕み、現在は病院にて療養中なのだ。

「……………」

さっきの話、滝壺に話すべきだろうか、と浜面は考える。

滝壺も元『アイテム』だ。知る権利はあるし、喜ぶかもしれない。しかし、ぬか喜びさせるだけかもしれないし、それに、

なにか嫌な胸騒ぎがするのだ。

闇のそこできなにか蠢いているような、嫌な胸騒ぎ。

もし今回の出来事が闇に繋がるなら、滝壺を巻き込むわけにはいかない。

もう彼女は闇とは関係ない。無縁なのだから。

「ま、絹旗の言う通り、死んだ人間が生き返るなんて非科学的でありえないしな」

「『おいおい決めつけるなよ。ありえないなんてことはありえない。なんて言葉があったりするのに』」

「ッ!？」

背後から急に聞こえた声に浜面は勢いよく振り返った。

さっきまで後ろには誰もいなかった。

ここは大通りではない。一般人が通ることを避けるような路地裏である。

浜面はスキルアウト時代の経験があったからこそ通っている道であり、
さっきまで人通りは皆無だった。

それなのに、この目の前の男は急に出現したのだ。

「……なんだお前は」

「『僕はただの転校生だよ。よろしくね、浜面仕上ちゃん』」

？

目の前の少年は感情の読めない笑顔で言う。

ぽっかりと穴が開いたような、からっぽの笑顔で。

「『聞きたいことがあるんだ。実は僕、道に迷ってるんだけど、窓の無いビルってどこにあるかわかる？』」

「聞きたいことがあるのはこっちの方だ！なんで俺の名前を……」

「『仕上ちゃんは有名だからねえ。無能力者なのに超能力者を倒した男なんだから』」

「っ!?!?」

浜面の身体に力が入る。

浜面が麦野沈利を倒したことは公にはなっていない。

それを知っている人間は暗部、学園都市の闇の人間だけ。

つまり、目の前の少年はかつての『アイテム』のような闇の住人の可能性が高いのだ。

「『まあそう身構えるなよ。君には危害を加えないよ。僕は君の、弱い者の味方なんだから』」

ぬう、と。浜面の近くに這い寄るように近づいた少年は笑顔だ。

「『辛かったよね。努力したのに報われなくて』」

「『スキルアウトになって楽しかったのに、能力者に慕っていたり、ダーを殺されて』」

「『組織を再起させようとしたのに、それさえも邪魔されて』」

「『責任をとって暗部に身を落とし、抗争に巻き込まれた』」

「『辛かったよね。能力者が、幸せ者が、憎かったよね』」

「『……な、んで……？』」

なんでこの少年は自分のことをこんなに知っているのだ。

「『だけど安心して！僕は仕上ちゃんの味方だよ。一緒にいこう』」

ぼん、と肩に置かれた手が、まるで気味の悪い蛇のように感じた。こいつは違う。と浜面の心が警告を鳴らす。

浜面は曲がりなりにも学園都市の闇で生きてきた人間だ。

そこで何人も暗部の住人を見てきた。

麦野沈利

垣根帝督

そして一方通行

圧倒的な闇を見てきた。

しかし、この少年はそのどのタイプの闇とも違う。

まるで子供が拳銃を持っているような、とりかえしのつかない、存在そのものが破綻しているような、そんな闇。

「『お近づきの印に、仕上ちゃんに会わせたい人がいるんだ』」

ぞわり、と気配がした。

またも浜面の背後で。

しかも、この雰囲気は浜面の良く知っている者の……。

「『この子も仕上ちゃんに会いたがっていたよ』」

少年は笑う。

「『ねえ、フレンダちゃん』」

死んだはずのフレンダがそこにいた。

?

「……ふ、フレンダ……」

浜面が振り向けば、そこにいたのは元『アイテム』の構成員だった金髪碧眼の女子高生。

フレンダ「セイヴェルン

目の前の現実が受け入れられない。かつて真つ二つに死んだ少女が現れたのが信じられない。

「……………」

「『涙溢れる感動の再会だね。天下第一武道会で悟空に再会したZ戦士たちを思い出すよ』」

よくわからない例えを言う少年とは対象的に、少女は黙ったままだ。

「ほ、本当にフレンドなのか？」

「……………」

浜面の問いに答えたのはフレンドではなく少年だった。

「『もちろんだよ。ただし前と違う点が一つだけ』」

少年は左手の人差し指を突き出しながら、

「『感情。まあ所謂、心ってやつを、なかったことにしてるから。そこらへんよろしくね』」

冗談でも言っようと言った。

「なにを……………？」

なにを言っているのだ、この男は。
心をなかつたことにした。
この少年はたしかにそう言った。

心。つまりは感情を。なかつたことにした。
そんなことが可能なのか？

学園都市最高の心理系能力者である、
超能力者（レベル5）の心理掌握なら可能かもしれない。
しかし、目の前の男は心理掌握ではない。心理掌握は常盤台中学の
女だと聞く。

そして、感情を無くすなんて高度なことを心理掌握以外にできるだ
ろうか。

答えはNOだ。

そんなことができれば、そいつは心理掌握に並ぶ超能力者（レベル
5）になっている筈である。

「『感情が無い方が便利。いや、彼女の復讐に丁度いいからね』」

「ッ！？復讐だと！？」

「『うん。麦野沈利ちゃんは生死不明だけど、絹旗最愛ちゃんと滝
壺理后ちゃんはこのうのと生きているだろう？そんなの許せないじ
やないか』」

平然と少年は言った。当たり前と言った風に。自然に。

「僕は弱い者の味方だけど、強い者の敵でねえ。というわけで元『アイテム』のメンバーを皆殺しにしようと思う」

かみなりのように、浜面の頭に衝撃が走った。

今、この少年は、絹旗最愛を、滝壺理后を殺すと言った。殺すと。

感情の無いフレンドを使って。

そうなったら、きつと絹旗と滝壺は反撃なんてできない。

かつての仲間だったからこそ、友だったからこそ。

そして、目の前の少年はそれを利用してしようとしている。

「もちろん仕上ちゃんも手伝ってくれるよね！だって仕上ちゃんも弱い者の味方なんだからね」

「……ふざけんな」

違う。

浜面仕上は弱い者の味方になったことは一度もない。

結果的にはそうなったこともあるかもしれない。

しかし、浜面の行動理念はそんなものではない。浜面の行動理念はいつも一つだけ。

「俺は弱い者の味方じゃねえ！絹旗や滝壺の味方なんだよ！」

さきほどまでの少年の一挙手一投足のおびえていた浜面はもういない。

その命を賭けて、少女たちを守ろうとする主人公ヒーローの姿がそこにはあった。

？

「『あ、そう。じゃあもういいや。』」

ざくり

そんな音を立てて、巨大な螺子が浜面の左肩に突き刺さった。ぐちゅりと肉にめり込む螺子を中心に赤い血がじわりと広がった。

「がつ、ぐあああああああ！！！！！」

壮絶な痛みが浜面の身体を襲う。

目の前の男に螺子で刺されたのだと、そのあとに気づいた。

「『まったく、残念でならないよ……。せつかく仕上ちゃんも友達マイナスになれると思ったのに』」

はあ、と本気で悲しそうにする少年。

両目には涙さえ溜めている。

「『……まさかこんなに誑かされているなんて。でもまあ、』」

かと思えば、涙なんてない屈託のない表情で、

「『元『アイテム』の二人を殺せば、僕と友達になってくれるよね』」

「ッ！！！！！」

言葉を聞いて、浜面仕上は渾身の力を込めて拳を握った。
しかし、

「『おっと。動かないで頂戴』」

ガガガッ！！

浜面の周りの大量の螺子を突き刺した
たったそれだけで少年は浜面の動きを封じた。

「『しばらくそうしていれば頭も冷めるでしょ。その間に僕は二人を殺しに行くからさ』」

「行かせるわけねえだろ！！これを外せ！！外せええええええええええ！！！！」

どれだけ身じろぎさせてもびくともしない、螺子の檻。
痛む肩など知ったことではない。

ここで動かなければ、自分が動かなければ、二人の少女が危ないのだから。

「『さあいこうかフレンダちゃん。まずは滝壺理……がッ!?!』」

無理やり拘束を解こうとしていた浜面の目の前で少年の姿が唐突に消えた。

いや、横なぎに吹っ飛んだのだ。

「超ヒマなので私も滝壺さんのお見舞いに行こうと思って、後を追いかけてみれば、」

代わりに浜面の正面に立っていたのは、さきほどまで会っていた少女。

室素を操る大能力者（レベル4）。

「絹、旗……」

「随分と変な状況になってるじゃないですか。浜面」

絹旗最愛であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2505z/>

とある過負荷の大嘘憑き

2011年12月10日01時48分発行